



デフアスリートを ささえる *vol. 3*



医科学編

ごあいさつ

全日本ろうあ連盟
スポーツ委員会委員長
太田 陽介



スポーツ庁は「する・みる・ささえる」といった多様なスポーツライフを通じて、スポーツ参画人口の拡大を目指しています。アスリートのプレーを「みる」、ボランティアの「ささえる」活動を通して、「する」スポーツへの興味が喚起され行動へとつながることが期待されており、きこえない人のスポーツ活動を通じた社会参加と共生社会の実現にも通じる取組になります。

きこえない人がアスリートのプレーをみるためには、スポーツ施設の情報アクセシビリティ向上、放送の字幕・手話言語付与などの整備が進められています。一方、きこえないアスリート(デフアスリート)がスポーツをするにあたっては、スポーツ関係者によるきこえないことや手話言語への理解促進とともに、デフアスリートのスポーツ活動をささえる手話言語通訳者の育成が重要になっています。

そこで、本委員会では令和2年度より、スポーツに精通した手話言語通訳者の育成を目的として、スポーツ庁の「障害者スポーツ推進プロジェクト事業」を受託しており、3年目となる令和4年度は、ドクター、トレーナー等、デフアスリートを取り巻く話に焦点を絞った医科学編と、専門種目としてバスケ競技、水泳競技、空手道競技を解説するパンフレットを製作しました。スポーツ活動の現場で通訳を行う方々の知識と技術の向上にこれらの手引が役立つことを願っています。

スポーツ分野で通訳するための準備

きこえない人のスポーツ活動を通じた社会参加を支える手話言語通訳者が、通訳者としての倫理観を備えた上で準備しておくべき知識と技術を、「共感力・協働力」「言語技能・表現力」「場面对応力・実践力」「スポーツ関連・競技ごとの専門知識」の4テーマに整理しました。



このハンドブック(vol.3)は、デフアスリート(きこえない選手)が国内外の競技大会等で経験する医療関連の事例、ドクターとトレーナーの役割分担、メディカルチェック、アンチ・ドーピング、そして初期対応のあり方を解説します。手話言語通訳者が、スポーツ医療場面の通訳に対応できる共感力・協働力・場面对応力・実践力・言語技能・表現力を養うに必要な知識・情報の入門編としてご活用ください。

デフアスリートが参加する競技大会の種類と特徴

デフアスリートが競技大会に参加する中で、怪我をした時などにどのような問題が起きるかを、4種類の大会でみてみましょう。

国内の一般競技大会（国民体育大会など）

会話やアナウンスは音声日本語が中心で、日本語文字の使用が行われていない場合があります。そのため、デフアスリートが会話に十分に参加できない、アナウンスが伝わらないなどの問題が生じることがあります。特別支援学校の体育部からの参加で通訳の可能な人が帯同することがありますが、一人の選手が医療機関に搬送された時に帯同者が付き添うのが困難なケースがあり、その時は地域の手話言語通訳者派遣を依頼することが考えられます。

国内のデフアスリート向けの競技大会（全国ろうあ者体育大会など）

会話は手話言語が中心であり、手話言語通訳者が必要な時に配置されます。書き言葉の使用も多く、デフアスリートが情報とコミュニケーションの面で感じる負担は大きくありません。選手の受傷病時には、応急処置や治療などの医療場面に対応するための知識の取得と現場での経験が手話言語通訳者に求められています。情報保障の面では、全国障害者スポーツ大会もここに含みます。

国外の一般競技大会（ユース世界大会など）

会話やアナウンスは音声英語が中心で、英語文字の表記も多く見られます。デフアスリートが会話に十分に参加できない、アナウンスが伝わらないなどの問題が生じることが国内の一般競技大会と同様です。そのためにデフアスリートが情報とコミュニケーションの面で感じる負担はかなり大きくなるでしょう。医療場面では、英語や現地の言語から手話言語への変換などの状況に応じた適切な通訳体制をあらかじめ主催者と確認して準備することが重要です。

国外のデフアスリート向けの競技大会（デフリンピックなど）

会話は国際手話が中心であり、アナウンスも国際手話でなされ、開催地の手話言語と現地語が加えられることも度々あります。英語文字の表記も多く、視覚がベースになった競技運営ですので、国際手話を解するデフアスリートであれば情報とコミュニケーションの面で感じる負担は非常に軽いものです。一方、国際手話を解しないデフアスリートとしては、国際手話への一日も早い慣れと、通訳による保障が必要となります。医療場面でも、デフアスリートの国際手話や英語への対応力を事前に確認しておくことが肝要です。

競技大会の種類によって、**手話言語通訳として必要な動きや求められることが異なります。**

競技大会での手話言語通訳を担当する場合、通訳対象となる**デフアスリートの特性**を知るとともに、**大会における特徴や環境**を理解し、必要とされる動きができるよう確認しておきましょう。

ドクターとトレーナーの役割

ドクターの役割

- ・監督、総務等に対して、メディカル関係の各種調整を行う最高責任者
- ・怪我、病気の診断と処置を行う
- ・怪我、病気の治療に対応
- ・練習、試合参加の可否を最終的に決定する
- ・リハビリ方針の決定及びトレーナーへの依頼
- ・チーム組織運営のサポート

アスレティックトレーナーの役割

- ・選手とドクター、選手と監督の間を繋ぐパイプ役
- ・怪我の予防に対して対応する
- ・身体機能測定と評価
- ・ドクター不在の場合の救急処置を行う
- ・選手の健康管理
- ・チーム組織運営のサポート
- ・アスレティックリハビリテーションの実施
- ・選手へのコンディショニング指導及び教育的指導
- ・「マッサージをする人」というわけではない

手話言語通訳として

ここでは、大会等で競技会場内にドクターやトレーナーがいる場合を想定します。大会の規模や種類によって、手話言語通訳の立場は異なりますが、大会本部のスタッフであったり、国際大会等では参加国のスタッフの場合があります。いずれにせよ、ドクターやトレーナーがきこえる人の場合、デフアスリートと間を通訳することとなります。**それぞれの役割を把握**した上で、メディカルルームやトレーナールームに同行し通訳することが求められます。

きこえないドクター・トレーナーの場合

デフアスリートときこえるドクター・トレーナー間を通訳するだけでなく、デフの大会等では、きこえないドクターが配置されることもあります。この場合、チームや競技団体に帯同するきこえるスタッフにその情報を通訳することもあります。また、帯同スタッフがきこえない人の場合、その**スタッフへの情報提供**にも配慮します。

マッサージ(カイロ)ベッドの使用

トレーナーがマッサージ(カイロ)ベッドを使用して施術を行う場合、顔がベッドに付く体勢となり、**手話言語通訳が見えない姿勢**となることがあります。施術前に必要となる情報を十分に通訳してから施術を開始しますが、トレーナーが呼吸などを意識させたいなどの理由から、施術中に通訳を求められることもあります。手話言語通訳を見るためにデフアスリートに無理な姿勢を強いることがないように工夫が必要です。ベッドに空いた顔部分の穴から通訳を見てもらうなどの工夫をする場合もあります。

ジェンダーへの配慮

男性・女性それぞれの手話言語通訳者を配置し、**ジェンダーへの適切な配慮**ができるよう、準備が求められます。

国際大会派遣時のメディカルチェック

手話言語通訳として

意思疎通支援事業に登録している、手話言語通訳者の多くの方が医療通訳を経験していると思われます。検査室への入室制限(レントゲン室)や各検査における**体勢(姿勢)**や**動きの有無を確認し、事前説明の実施**や**手話言語通訳者の検査中の立ち位置**を決定することが求められます。

メディカルチェックには、内科項目と整形外科な項目があります。

日本スポーツ科学機構(JISS)では代表選手の派遣時などに、以下の項目をチェックしています。

メディカルチェック項目(内科)

- 1 尿検査項目：尿蛋白・尿ウロビリノーゲン・尿糖・尿潜血
- 2 血液検査項目：図参照
- 3 胸部レントゲン検査：正面一方向撮影
- 4 安静時心電図検査
- 5 スパイロメトリー(肺機能検査)
- 6 心臓超音波検査(必要に応じて)
- 7 内科診察：既往歴、内服薬、アレルギー、聴診、現病歴など

スパイロメトリー(呼吸機能)検査

1. マウスピースをくわえる
2. 息を吸ったあと勢よく吐く



やまぐち呼吸器内科・皮膚科クリニックホームページより

メディカルチェック項目(整形外科)

1 アライメントチェック

- ① Carrying Angle ② O・X脚チェック ③ Q-Angle ④ 足部のチェック ⑤ 脚長差 ⑥ 体幹側弯

2 関節弛緩性テスト

- ① 手関節屈曲 ② 肘関節進展 ③ 肩関節回旋 ④ 脊柱前屈 ⑤ 膝関節反張 ⑥ 足関節背屈
⑦ 股関節外旋 ⑧ 関節弛緩性

3 タイトネステスト

- ① 体幹前屈 ② 股関節内旋 ③ 下腿三頭筋 ④ 腸腰筋テスト(トーマステスト)
⑤ 大腿四頭筋(大腿直筋)テスト(Elyテスト) ⑥ ハムストリングテスト(SLR)

4 整形外科診察：既往歴、手術歴、現病歴(怪我をしている場所)

必要があればレントゲン検査やMRIで精査など

※ 次ページに関節弛緩性テストとタイトネステストの図があります

国際大会派遣時のメディカルチェック

メディカルチェック項目(整形外科)

↓ 2. 関節弛緩性テスト

- ①手関節：母指が前腕につけば陽性
- ②肘関節：肘が90°以上過伸展すれば陽性
- ③肩関節：前屈時に手のひら全体が床につけば陽性
- ④肘関節：肘が15°以上過伸展すれば陽性
- ⑤肩関節：背部で指が握れるのであれば陽性
- ⑥足関節：足関節が45°以上背屈すれば陽性
- ⑦股関節：足先が180°以上開けば陽性



↓ 3. タイトネステスト

- ①腰関節伸筋群(大腰四頭筋)
- ②腰関節屈筋群(ハムストリングス)
- ③肩関節周辺筋群
- ④股関節屈筋群
- ⑤腰背筋群 大腿後過筋群



聴力検査

デファスリートが国際大会に出場するにはいくつか条件があります。

例としてデフリンピックへの参加条件は「補聴器または人工内耳を外した状態で、両方の耳のうち聞こえている耳の平均聴力レベル(PTA)が55dB以上の聴覚障害を有するろう者であること」です。

このことを証明するためにはICSD(国際ろう者スポーツ委員会)公式オーゾグラムの書式を使用し、医療機関で「聴力検査」を受けなければなりません。

必要な検査項目

- 1 気導
- 2 骨導
- 3 ティンパノグラム(ティンパノメトリー)
- 4 耳小骨筋反射(リフレクソメトリー)



アンチ・ドーピング

1. アンチ・ドーピング(以下、AD)

クリーンで公正なスポーツを守るための活動。

10年ほど前まではADへの意識が薄く情報も少ないため、意図的ではない「うっかり」によるAD違反が多くありました。アスリートとしての自覚を持ち、ADに主体的に関わることがとても重要です。ADに関して世界アンチ・ドーピング機構(World Anti-Doping Agency: WADA)が世界共通の国際基準(毎年1月1日に更新)を定めており、国内では日本アンチ・ドーピング機構(JAPAN Anti-Doping Agency: JADA)がADをしています。

公益財団法人日本アンチ・ドーピング機構



公益財団法人日本アンチ・ドーピング機構
<https://www.realchampion.jp/>

2. ドーピング検査

ドーピング検査(以下、検査)はいつでもどこでも行われます。検査の対象になったらドーピング・コントロール・オフィサー(Doping Control Officer: 以下、DCO)もしくはシャベロンが付き添い、検査室(Doping Control Station: 以下、DCS)で検査が終了するまで常にDCOが同行します。そしてどんな理由があっても検査を拒むことはできません。

・タイミング

①競技会検査(大会期間中)

特にメダル確定直後にランダムで選ばれることが多いです。

②競技会外検査(大会期間以外)

対象となるのはほとんどがトップレベルのアスリート(現時点でデファアスリートは少ない)です。競技会外時のスケジュールを年間複数回に分けて登録し、抜き打ちで検査が行われますので、競技会以外の日も常に自分の体に入れるものに気をつけなければなりません。

・検査方法

検査対象のアスリート自身が作業するため、流れを知っておきましょう。

①尿検査

最も多い検査方法。すり替えなどの不正防止のためオープンなお手洗い(ドアを閉めない)でウエアを足首までおろして検査員の目の前で尿を採り、A・Bのガラス製ボトルに入れて封をします。

②血液検査

より高度な検査方法で血液を採取して検査するため、ごく微量であっても検出されます。ただし、これまでのデフ国際大会ではほとんど行われていないようです。

アンチ・ドーピング

・DCOとシャペロン

アンチ・ドーピング機構が養成し認定した者で、ほとんどがきこえる人でコミュニケーション手段としては筆談(英語)が主になります。アスリートの権利として監督・コーチ・トレーナーなどからスタッフ1名のみが付き添えます。きこえない選手向けの国際大会では国際手話通訳者などが入ることがあります。



2017トルコサムスンデフリンピックDCS(一社日本ろう自転車競技協会提供)



2015アジア太平洋ろう者競技大会(台湾)ドーピング検査(一社日本ろう自転車競技協会提供)

3. アスリートの責務

世界的にADのルールが厳しくなったというよりもアスリート自身を守ることがスポーツの価値を守り、ひいては社会そのものを守るという意識が徹底してきているともいえます。もはや医薬品の範囲だけにとどまらず行動や意識にも及んでいます。スポーツの価値は自分1人だけのものではなく仲間のアスリート、スタッフ、家族、地域、その競技そのものなど多岐にわたっています。スポーツの価値を守るために自分は何をするべきなのか意識していくことがADの本質でもあります。

・AD教育を受ける

アスリートだけではなく周りの関係者もAD研修会を積極的に受けてADの知識を身につけましょう。

・アスリートであることのアピール

受診時に、医師や薬剤師にアスリートであることをしっかり伝えましょう。

・自分が使うものに責任を持つ

① 医薬品の成分をglobal DROで調べる(名称は正確に入力する)

URL : <https://www.globaldro.com/JP/search>



← global DRO

② スポーツファーマシスト(AD専門知識をもつ薬剤師)に聞く

URL : <https://www.sp.playtruejapan.org/>



← スポーツファーマシスト

③ サプリメントや化粧品類の成分をきちんと確認し、自己責任で使用する

・TUE(薬の使用及び治療使用特例)を申請する

病気やケガの治療のために禁止物質や禁止方法を使用せざるを得ない場合、特例として承認を得れば使用が可能となります。

アンチ・ドーピング

4. 手話言語通訳

国際大会が行われる会場によっては、例えば現地音声言語 ⇄ 音声英語 ⇄ 音声日本語・国際手話・ASL など ⇄ 日本の手話言語などと複数の言語を介するため、時間がかかったり漏れや認識のずれが起る可能性もあります。

検査時はアスリートの負担にならないようにできる限りスムーズにやりとりするためにもADの知識をもつ手話言語通訳者が必要です。

手話言語通訳として

意図的ではないAD違反を防ぐためにも、デフアスリートの関係者となる手話言語通訳者がその知識を得ることは、正しい通訳をするためにも必要不可欠です。

事前説明会の通訳

大会参加者や選手団に対して、ADに関する事前説明会が開催されることがあります。

どの通訳場面でも同じことがいえませんが、**デフアスリートがADに対して主体的にかかわることができるよう**、正確な通訳が求められます。

また、競技にかかわる手話言語通訳者も説明会等で配布される文書等を確認し、**大会のADルールを把握**しておくようにしましょう。

聴覚ドーピング

デフの大会等では、薬物ADだけでなく、聴覚AD(きこえの範囲が規定内であるか否か)を問われることがあります。

聴力検査やABR(聴性脳幹反応)検査が行われることがあります。

大会中に検査を求められることもありますので、その検査の種類や方法についても理解しておきましょう。



医学事始ホームページ「ABR」

処置室での治療・検査への対応と注意点

処置室で医師に伝えて欲しいこと

- ・症状（いつから、どこが、どのような状態、どんな時になど）
- ・既往歴、家族歴、アレルギー（特に薬）
- ・いま内服している薬（もしあれば）他の医療機関で受けている治療について
- ・日常生活に関すること（食事や運動、睡眠などの習慣、仕事、趣味、サプリメントなど）
- ・どんな治療を希望するか（薬の形状→粉より錠剤が良い、希望する治療法より良い治療法があるのかなど）
- ・治療（処置）を受けた経過や結果（特に薬の副作用やドーピングに引っかからないか、処置によって痛みなどの症状がどう変わったかなど）

治療を受ける前に必ず伝えてほしいこと

- ・アレルギー（造影剤、キシロカインなどの薬剤アレルギー）
- ・MRI検査が受けられるのか？（人工内耳などで検査を受けられない人もいます）

手話言語通訳として

意思疎通支援事業における医療通訳の場合、事前に対象者の一定の情報（個人情報や既往歴、主訴など）を把握した上で通訳に入ることが多くなりますが、スポーツ競技にかかわる場面では、傷病の発生現場から通訳することが求められます。チーム帯同の手話言語通訳は、その発生場面を見ている場合もありますが、大会本部等に詰めている場合、**事前情報が少ない中、通訳に入る**こととなります。

傷病発生時の流れの一例

[傷病発生（フィールド等）]→[現場での診断・処置]→[メディカルルーム(処置・治療)]→[搬送]→[医療機関]・・・

手話言語通訳者は、各場面で**医療従事者が必要とする情報を把握**するとともに、必要に応じた**情報収集**が必要となります。痛みが強くデフアスリートとのコミュニケーションが成り立たないときなど、発生状況の分かる方の同行や情報収集が必要となる場面もあります。

痛み・状態の表現

きこえる人の間では、痛みや状態を**オノマトペ（擬音語・擬態語）**で表現することが多くあります。ドクターなど医療従事者から「ピリピリしますか」などと聞かれた場合、逆にきこえない選手から痛みの表現をされた場合の伝え方など、きちんとした相互理解に繋がられるよう、中途半端にはせず、**コミュニケーションの確立に注力**します。

スポーツ中に起こる傷病と初期対応①

「外科的障害(筋骨格系・四肢・体幹)」

骨折

骨に非常に強い力が加わり、骨が壊れることを骨折といいます。

骨とその周囲には神経と血管が豊富ですので、骨折するとその部位に痛みと腫脹が出現します。

骨折すると、動かせなくなったり、外見が変形することがあります。しかし、単なる打撲や関節脱臼でも似た症状が出るので、診断をはっきりさせるにはX線(レントゲン)写真を撮ります。

捻挫

関節に力が加わっておこる怪我のうち、骨折や脱臼を除いたもの、つまりX線(レントゲン)で異常がない関節の怪我は捻挫という診断になります。

具体的には靭帯や腱というような軟部組織といわれるものや、軟骨(骨の表面を覆う関節軟骨、間隙にはさまっているクッションである半月板や関節唇といわれる部分)の怪我です。

怪我をした関節の周囲に腫れや痛みが見られ、損傷が強いときは下肢の場合、歩行も困難となります。

脱臼

骨と骨をつないでいる関節部分の骨が本来の位置からずれてしまった状態をいいます。

脱臼の程度によって、骨の関節面が関節から完全に外れた「完全脱臼」と関節から外れきっていない「亜脱臼」に分類されます。

注意点:骨折や捻挫や脱臼が起こったときは、怪我をしたところの近くにある血管や神経を傷つけていないか医師が確認をすることがあります。その時は、怪我をしたところの近くを触って感覚があるかを確認したり、脈を測ったりします。

腰痛(椎間板ヘルニア)

スポーツ中の激しい動作や、何か物を持ち上げようとしたり、腰をねじるなどの動作をしたときなどに起こることが多いです。

痛みの原因はさまざまで、腰の関節や椎間板に強い力が加かって、腰を支える筋肉や腱、靭帯などの軟部組織の損傷などが多いと考えられます。

しかし、下肢に痛みやしびれがあったり、力が入らないなどの症状があったりするときには椎間板ヘルニアや十代の若い選手では、疲労骨折を起こしている分離症の場合もあります。

注意点:椎間板ヘルニアによる圧迫などで脊髄神経を痛めていると緊急で処置が必要になることがあるため、診察時に脚をあげて痛みやしびれがひどくならないかを診たり、腱の反射や足の筋力が落ちていないかを確認します。

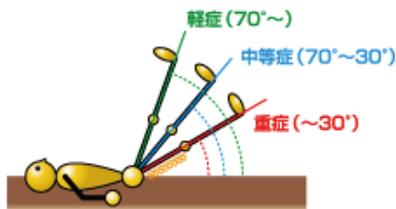
スポーツ中に起こる傷病と初期対応① 「外科的障害(筋骨格系・四肢・体幹)」

肉離れ

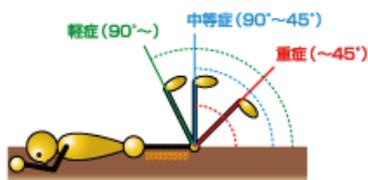
スポーツ中、ダッシュやジャンプしたときに、ふくらはぎの内側や大腿の裏側に強い痛みとともに生じます。

重症だと体重をかけたり、ストレッチすると非常に強い痛みのために通常の歩行が出来なくなります。受傷した時の状況や典型的な部位に圧痛があれば、診断できます。時には断裂部の陥凹を触れることもあります。筋肉をストレッチした時の痛みで重症度(図)がある程度分かります。

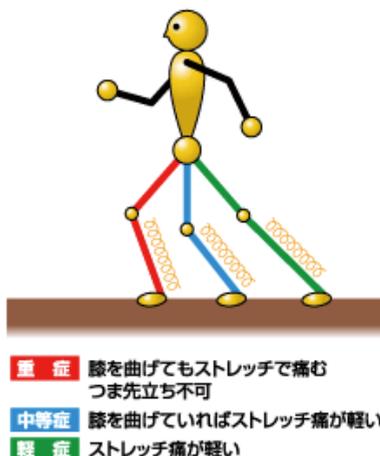
ハムストリング(大腿後面)の場合



大腿四頭筋(大腿前面)の場合



腓腹筋(ふくらはぎ)の場合



日本整形外科学会ホームページより
<https://www.joa.or.jp/>

手話言語通訳として

外科的障害が疑われる際に、画像診断(レントゲン)による検査が行われます。X線を使用した画像診断(レントゲン・CT)は、放射線被ばくを避けるため、検査中の手話言語通訳者の入室が制限されます。検査の流れや動きについて、十分な事前の説明と受検者であるデフアスリートの理解を確認するとともに、急な通訳の必要に対応するため、操作室などに待機する必要があります。

スポーツ中に起こる傷病と初期対応① 「外科的障害(筋骨格系・四肢・体幹)」

応急処置(RICE処置)

スポーツの現場で怪我が起こったとき、病院や診療所にかかるまでの間、損傷部位の障害を最小限にとどめるためにおこなう方法を「応急処置(RICE処置)」といいます。

患部の安静(Rest)、氷などでの冷却(Icing)、テーピングでの圧迫(Compression)、患肢の挙上(Elevation)の4つの頭文字を取ってRICEといいます。

この応急処置は、早期スポーツ復帰に欠かせないものです。



日本整形外科学会ホームページより
<https://www.joa.or.jp/>

受傷部位によるコミュニケーションの制限

きこえない人のコミュニケーションに欠かせないのが「目」と「手」です。

その部位に怪我があるときは、コミュニケーションに制限がかかることがあります。可能な限り、**コミュニケーションに必要な機能を残しながら、必要な処置や治療が受けられるような配慮**を求めることも、時には必要となります。

スポーツ中に起こる傷病と初期対応②

「外科的障害(頭部)」

脳振盪

頭部に衝撃を受けた後に起こる一時的な意識の障害や記憶の喪失を伴う脳の機能障害のこと。外傷により引き起こされる意識状態の変化であり、意識消失を伴うことも伴わないこともあります。

頭頸部外傷が発生したときのフローチャート

①意識障害の確認

・意識消失が一瞬でもあったか？ ・反応にいつもと違いがないか？ ・呼びかけにしっかりと受け答える(反応する)か？ ・今いる場所が分かるか？ ・頭をぶつけたときのことを覚えているか？ など

②頸髄・頸椎損傷の確認

・頸に痛みがないか？ ・手足にしびれがないか？ ・力がはいりにくくないか？

③脳振盪症状の確認

・頭痛やめまい、吐き気はないか？ ・ものが二重にみえないか？ ・混乱や興奮状態にないか？
・ふらつきはないか？

①、②、③のどこかで異常があれば脳振盪の疑いがあるため、プレーは中止し医師の診察をうけることが望ましいです。



顔面外傷

①目の周囲を打って、・物が二重に見える ・鼻出血がある ・頬や上唇にしびれがあるなどの症状があれば、眼窩底骨折の可能性があります。鼻を絶対にかまないようにしましょう。

②鼻血が出たときは、座った姿勢で軽く下をむいて、小鼻を5～10分つまんで止血します。横になったり、上を向くと気管などに血液が流れ込む可能性があるため、ならないようにしましょう。

スポーツ中に起こる傷病と初期対応③

「内科的障害」

スポーツ中に起こる内科的な疾患で緊急に対応が必要な疾患。

大会などに参加する選手のAMPL (Allergies/Medication/Past medical history/Last meal) を確認しておくことは非常に大切です。

熱中症

熱中症とは、体温が上がり、体内の水分や塩分のバランスが崩れたり、体温の調節機能が働かなくなったりして、体温の上昇、めまい、けいれん、頭痛などのさまざまな症状を起こす病気のこと。

症状：立ちくらみ、筋肉痛、大量の発汗などが症状として現れます。頭痛、嘔吐、倦怠感が出ることもあります。ひどくなると意識障害やけいれんなども引き起こし、命に関わることもあります。

治療：涼しい環境へ移動し、冷たい液体を吹きかけたりして体温を下げます。症状が悪化するときは救急搬送が必要となります。

喘息

気道に起こる急性の炎症です。広範囲にさまざまな程度の気道閉塞を起こします。特に運動した時に起こる喘息を「運動誘発ぜん息」と呼びます。

症状：呼吸困難が主な症状ですが、重症になると不整脈や血圧の低下を招き死に至ることもあります。

治療：・酸素投与 ・短時間作用性β2刺激薬の吸入など

注意点：喘息の治療で使用する薬の中には、ドーピングで禁止されている薬があります。重症のときは仕方ありませんが、医師に選手がドーピング検査の対象ですとしっかりと伝えるようにしましょう。

点滴時の注意点

外科的障害による手や腕の治療と比べれば、点滴針を刺した腕の可動域は広く・大きくなりますが、一定の制限を強いられることとなります。もちろん、医療従事者の判断もありますが、利き腕へ点滴針の挿入がその後の**手話言語によるコミュニケーションに影響を与えるか否か**というあたりについても配慮したいものです。

救急搬送時の通訳

外科的障害でも同じですが、搬送時の救急車内は限られたスペースに多くの医療機器等が積載されています。救急車内でのデファスリートへどのように情報保障するか、**救急隊等とも協力**しながらの通訳が求められます。

スポーツ中に起こる傷病と初期対応③

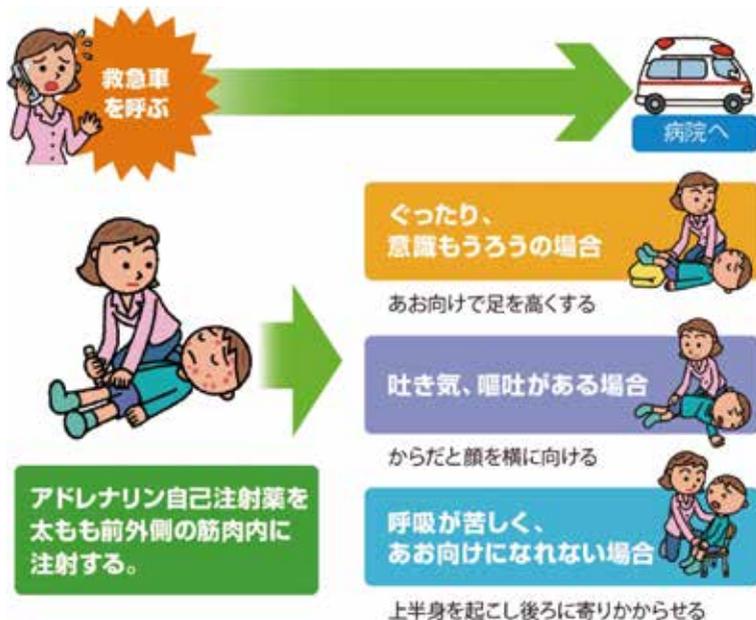
「内科的障害」

アナフィラキシーショック

蜂の毒や薬物、食物などが原因となって、引き起こされる重度のアレルギー反応で、全身に様々な影響を及ぼします。血圧の低下や意識障害などを引き起こし、生命を脅かす危険な状態になることもあります。発症にアレルギーの既往の有無は関係ないと言われています。

症状：全身のじんましん、赤みなどの皮膚症状。目の痒みやむくみ、唇の腫れなど粘膜の症状。腹痛や嘔吐などの消化器の症状。息切れやせきなどの呼吸器の症状などが現れます。

治療：エピペンなどでアドレナリン自己注射薬を使用します。



手話言語通訳として

内科的障害に関しては、意思疎通支援事業で多くの手話言語通訳者が通訳を経験している現場の一つと考えられます。**障害が目に見えない分、医療従事者等とのコミュニケーションがより重要**となる場面です。きちんとした双方間の情報共有を心がけましょう。

現場で起きた事例

腕(手)の固定で、コミュニケーションが取れなくなった事例

デフリンピックバスケットボール競技で、日本選手が相手チームの選手と衝突して転倒。大会本部が迅速な対応で、バックボード上で手足を固定し、AEDを装着した。直後に本人が大丈夫であることは確認が取れたが、手足を縛られたのもあり、選手はどうしていいかわからず、パニックに。この選手はほとんど声を使わない選手で、手話言語で答えたかったが、手を縛られていたため、コミュニケーションができなくなりました。結局、過呼吸になってしまいました。

➡もしこのような場面に遭遇したら、「手をフリーにできるか」と、救急隊等に伝えてください。

デフアスリートの特性による検査誤測定の事例

デフリンピックに参加するためには、ICSD(国際ろう者スポーツ委員会)に登録するために健康診断を行う必要があります。検査項目の中には、肺機能検査があるが「1秒率」の検査結果が、基準値よりも低い選手が多くなります。検査技師からは「息を吸って」「吐いて」「一気に吐いて下さい」という指示で、検査を行いますが、正しく聞き取れない、息の吐き方が慣れてないなどで、正しく測定することが困難なときがあります。

➡きこえない人の中には、呼吸のコントロールが苦手な人もいます。検査方法を理解するためにも、手話言語通訳者は一度経験しておくとう良いでしょう。

障害特性の無理解による誤解

サッカー選手で、ヘディング練習をたくさん行った翌日は、めまい、耳鳴りなどが起きて、立てなくなることがあります(2、3日で回復する)。医師からはメニエール病と診断されているので、極力ヘディング練習は行わないようにしているが、試合に向けて練習が抑えられなくなることもあります。

➡サッカーをやって、疲れたからそんな言い訳をしている...と思うコーチや仲間もいると聞きます。逆に、体を動かすことが好きな人は、たとえドクターに止められていても、やってしまう人がいます。手話言語通訳者が選手に「やめなさい」とは言い難いとは思いますが、こんな事例もあります。

人工内耳の事例①

サッカー選手で人工内耳の場合、インプラントの損傷を気にして、思い切ってヘディングができないため、ポジションはサイドバック(走る、キックが多いポジション)しかできないという選手もいます。

➡手話言語通訳者が判断することではありませんが、アメリカでは人工内耳でも自己責任で制限なくプレーしています。

現場で起きた事例

人工内耳の事例②

人工内耳の人は、剣道の防具をつけての試合は行ってはいけないと言われていました。

➡最近では「注意してやってもいい」という考えになってきています。

アメリカでは「自己責任」のもと、ヘルメットをしてアメリカンフットボールを行っています。

とても難しい問題ですが、日本では「危ないからダメ」という考えで、きこえない人の競技種目が制限されているのは事実です。

脳震盪の判断基準への影響

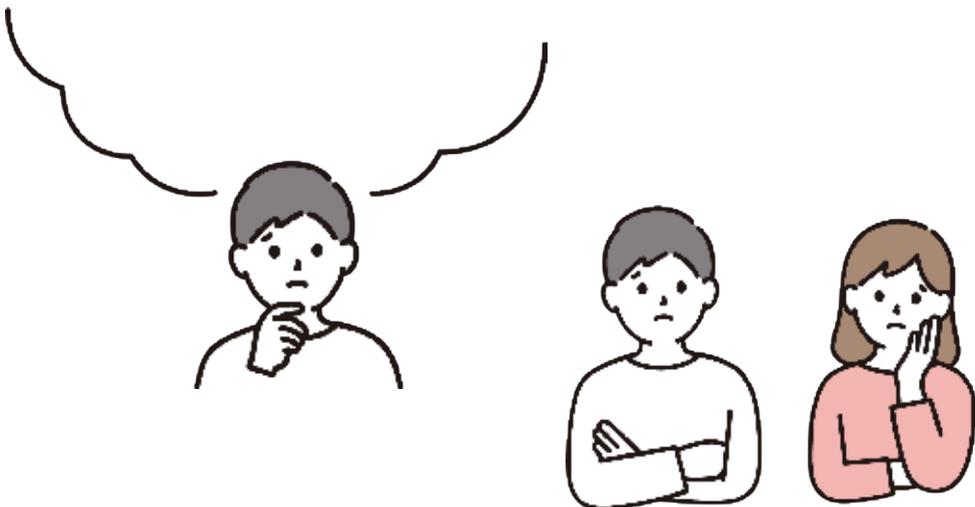
スポーツ現場では、脳振盪が起ることが多くあり、プレーを続けられるかの判断をするための、世界共通の評価方法があります。

その方法は、問いかけが多く、試合中に補聴器を外すデフアスリートには何を行っているのか理解できず、回答を間違えることもあり、重度の脳震盪と判断されてしまう可能性もあります。

また、他の評価方法として、目を閉じた状態でバランステストを行うことになっています。

しかし、デフアスリートの中には、目を閉じた状態ではバランスが悪い選手もいるため、脳震盪であると判断されてしまう可能性があります。

➡デフアスリートと評価者のコミュニケーションの問題により、間違った評価とならないよう、手話言語通訳としてきちんとしたコミュニケーションの確立はもちろんのこと、必要に応じた助言も必要です。



きこえない関係者との協働

医療に関する通訳はきこえる人が主に担当しますが、必要に応じてきこえない人が入ることでより効果的にコミュニケーションを成立させることができる場合があります。

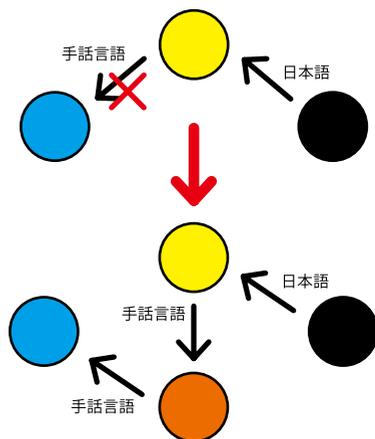
例1：デフアスリートが通訳者(きこえる人)の手話表現を読み取れないときに、その内容をきこえない人がデフアスリートにわかりやすく手話表現する。

きこえる通訳者があるデフアスリートの手話や競技種目に慣れていない場合や医療分野の専門用語や言い回しに不慣れな場合、デフアスリートに合った手話表現を選択できない場合があります。

(通常の医療通訳と違い、待合室効果などの期待ができない場合があるためです)

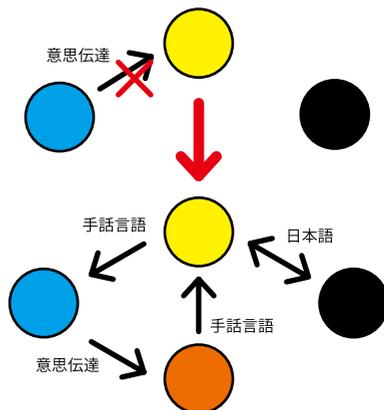
また、デフアスリートが激しい痛みで不慣れな手話言語通訳の表現を再翻訳できない状況もあり得ます。

そのような場面では、その人の手話に慣れているきこえない人がきこえる通訳者の手話表現を見て、デフアスリートそれぞれに合った分かりやすい手話表現にします。



例2：デフアスリートがいつもと同じように手話表現できないときに、その表現をきこえない人が読み取ってきこえる通訳者に伝える。

デフアスリートが手腕に怪我をするなどで、十分な手話表現ができないときに、そのデフアスリートに慣れているがその限られた手話表現や口の形、顔の表情などを読み取って、きこえる通訳者に手話表現で伝えます。

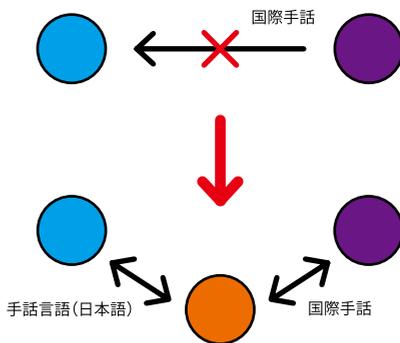


国際手話通訳者(きこえない人)との協働

例3：国際大会で組織委員会の医療担当スタッフが国際手話で話すときに、国際手話通訳者(きこえない人)が日本手話言語に通訳する。

デフアスリートが怪我をしたときや病気になったときに、組織委員会の医療担当スタッフが医療機関の場所や注意事項を説明するときがあります。場合によっては組織委員会が手配した車に同乗することもあります。そういうときに国際手話通訳者(きこえない人)が国際手話と日本手話言語間の通訳を行うときがあります。

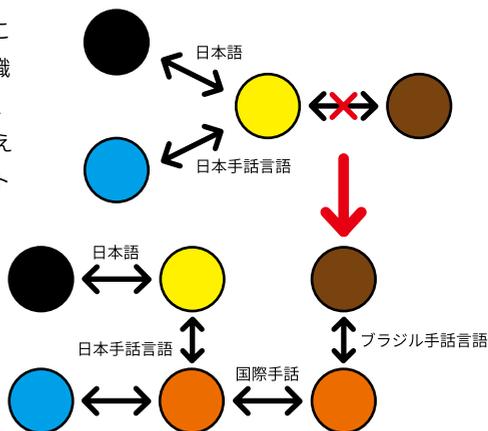
デフアスリート 国際手話使用者(きこえない人) 通訳者(きこえない人)



例4：国際大会できこえる通訳者同士の音声コミュニケーションが難しいときに、きこえない人が国際手話と日本手話言語の通訳をする。

例えばブラジルで開催される国際大会で、日本のきこえる通訳者がポルトガル語を理解しないときに、組織委員会がポルトガル語と国際手話の通訳者を準備し、その国際手話と日本手話言語の通訳を担当するきこえない人も入って、その場にいる日本のデフアスリートや他の日本人も理解できるようにします。

デフアスリート きこえる人 外国語使用者(きこえる人)
通訳者(きこえる人) 通訳者(きこえない人)



手話言語通訳として

他国の手話言語や国際手話を介する場合、デフアスリートや周辺の関係者の理解力に応じてリレー通訳となる場合があります。状況に応じた臨機応変な対応が求められます。

意思疎通支援事業における手話言語通訳者派遣

デフアスリートが傷病により医療機関に搬送され、治療に要する時間が長時間に渡る場合、搬送時に同行した競技会場等を担当する手話言語通訳者から、意思疎通支援事業における手話通訳派遣による手話言語通訳者に引き継がれることがあります。ここでは、受傷等のデフアスリートが競技開催地域外の居住だった場合、派遣（いわゆる広域派遣）について確認しておきます。

これは、大会規模や種類に関係なく、発生することがあります。**広域派遣は、地域によって異なることもあります。**ここでは一例を挙げますが、担当する手話言語通訳者は、開催地域の制度やしくみをきちんと整理し理解しておきましょう。

制度の整理

手話言語通訳者の派遣（「意思疎通支援」といいます）は、「障害者総合支援法（※1）」における地域生活支援事業の中の意思疎通支援事業で実施されています。

居住地域外での手話通訳派遣依頼（※2）

都道府県が手話通訳者の派遣を行います。

➡実情として、情報提供施設、聴覚障害当事者団体などが都道府県から事業委託を受けていることが多いようです。

広域派遣の手順（原則）

- 1 居住（住所のある）自治体の障害福祉担当窓口にて、手話言語通訳者の派遣を依頼
- 2 自治体の担当窓口から、都道府県の担当窓口にて手話言語通訳派遣を依頼
- 3 手話言語通訳者の派遣調整（手配）
- 4 手話言語通訳者の派遣

※原則としては、居住地自治体への事前申請となりますが、居住地以外の場所で、急病や事故等で緊急に手話言語通訳が必要となった場合は、現地の自治体の障害福祉担当窓口にて相談することが現実的です。

全国からデフアスリートが参加するような大会の場合

競技中の事故等緊急時の対応を想定した広域派遣調整、例えば、競技開催県で広域派遣を実施している事業体が窓口となり、対象者の居住自治体と連絡調整することを検討する方法が現実的と考えます。

※1：「障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律」

※2：地域生活支援事業（都道府県事業）の「意思疎通支援を行う者の派遣に係る市町村相互間の連絡調整事業（いわゆる「広域派遣」）」として実施

第23回夏季デフリンピックに出場、メダルを取った選手4人に、スポーツ活動で困ったことを話していただきました。動画を下記サイトに掲載しています。



<https://youtu.be/PBvezrrD2MM>

デフスポーツにおける手話言語通訳者の育成等に係る検討委員会 委員名簿

国立大学法人筑波技術大学 教授	おおすぎゆたか 大杉 豊
国立大学法人筑波技術大学 教授	なかじま ゆきのり 中島 幸則
一般社団法人日本手話通訳士協会 事務所長	くさの まさのり 草野 真範
順天堂大学スポーツ健康科学部 准教授	しおた ゆうき 塩田 有規
NPO日本デフバスケットボール協会 普及委員長	はせがわ としお 長谷川 俊夫
一般社団法人日本デフ水泳協会 常務理事	ふじかわ あやか 藤川 彩夏
一般社団法人日本ろう空手道協会 監督	たかはし ともこ 高橋 朋子
全日本ろうあ連盟スポーツ委員会 事務局長	やまだ なおと 山田 尚人

デフアスリートをささえる vol.3

発行日 2023年3月31日

発行 一般財団法人全日本ろうあ連盟
スポーツ委員会

T E L : 03-3268-8847

F A X : 03-3267-3445

メール: jfd-sc@jfd.or.jp

U R L : <https://www.jfd.or.jp/sc/>

一般財団法人全日本ろうあ連盟 スポーツ委員会

このガイドブックは、令和4年度「障害者スポーツ推進プロジェクト(障害者スポーツの指導等に係る競技別の標準化・マニュアル作成等)」(スポーツに精通した手話言語通訳者の育成)の一環で作成しました。

[関連情報]

【Deafsportal (デフスポータル)】

デフスポーツ・デフリンピックの情報を発信する総合ポータルサイトです。最新情報が随時更新されています。 <https://deafsportal.com/>



【デフアスリートをささえる 競技別手話言語通訳ガイド サッカー編】

<https://www.jfd.or.jp/sc/files/deaflympics/deafathletesasaeru-soccer.pdf>



【スポーツ手話ハンドブック】

スポーツ大会や式典、大会運営に関わる人に役立つ用語を中心に幅広い分野の手話を246単語収録、さらにスポーツ関連の情報を掲載しています。 <https://jfd.shop-pro.jp/?pid=132926516>



【デフアスリートをささえる 競技別手話言語通訳ガイド 自転車編】

<https://www.jfd.or.jp/sc/files/deaflympics/deafathletesasaeru-cycling.pdf>

【聞こえないスポーツ選手の メディカルサポートについて】

聴覚障害ならではの特性や事例などをより深く知っていただくきっかけに作成しました。 <https://www.jfd.or.jp/sc/files/deaflympics/deafsports-medicalsupport.pdf>



【デフアスリートをささえる 競技別手話言語通訳ガイド 陸上編】

<https://www.jfd.or.jp/sc/files/deaflympics/deafathletesasaeru-athletics.pdf>



【デフアスリートをささえるVol.1】

<https://www.jfd.or.jp/sc/files/deaflympics/deafathletesasaeru-vol1.pdf>

【デフアスリートをささえるVol.2】

<https://www.jfd.or.jp/sc/files/deaflympics/deafathletesasaeru-vol2.pdf>



【デフアスリートをささえる 競技別手話言語通訳ガイド 卓球編】

<https://www.jfd.or.jp/sc/files/deaflympics/deafathletesasaeru-tabletennis.pdf>